

川上郁雄著『JSL バンドスケール【小学校編】

—子どもの日本語の発達段階を把握し、ことばの実践を考えるために』

(2020、明石書店)

<サンプル>

小学校 中高学年

【話す】

小学校 中高学年 話す レベル1

このレベルの主な特徴	初めて日本語で話すレベル
子どもの様子・ ことばのやりとり	<ol style="list-style-type: none">1. 言いたいことが言えず、身振りで伝えようとする。2. 単語一つの一語文で、意味を伝えようとする。二語文になることもある。3. 教師や他の子どもが言った語句をそのまま繰り返す。4. 意味を確認するために、同じ第一言語を話すクラスメイトに第一言語で話しかけたり、通訳を求めたりする。5. 学習活動の中で、身振りで応えたり、他の人の行動を真似たりすることがある。6. 周りを注意深く観察するが、話さない場合もある。7. 第一言語で獲得した会話のスキルをもとに、コミュニケーションをとろうとする。8. 第一言語に関わる文化的知識や態度、価値観を持っていることがある。9. 日本語を「話す」力はなくても、第一言語を使う家庭・地域社会などでは、子どもの年齢に応じた範囲で、第一言語を話すことができる。ただし、個人差がある。

解説① 「第一言語の力」:

このレベルの子どもは、日本語で話すのは初めてですが、耳にした日本語の単語を言ったり、他の人を真似て繰り返したりすることがあります。また、家庭や同じ第一言語を話す友だちの間では、第一言語を、自信を持って話す子どもがいます。そのことは、日本語を学ぶことにも有効に働きます。第一言語で話す経験や第一言語から得た知識が「話す」力の基礎をつくると考えられます。

ただし、日本生まれで、複数の言語の間で成長する子どもの場合、その第一言語の力が弱いことがあります。個人差がある点にも留意することが大切です。

2の例:

「その本、見せて」「この本、読んでもいい？」などの意味で、ただ「ほん」と言う。

5.

第一言語を使用するのは、第一言語によるコミュニケーション能力があるということを意味する。決して、不適応を起こしているわけではない。

7

これを「沈黙期間」という。
→小学校低学年「聞く」レベル1を参照。

8の例

第一言語での学習経験があると、理科の実験や総合的学習での「町の探検」などの活動に、日本語は使わないが参加していく。

指導上のポイント:

このレベルの子どもに、無理に話させようとする必要はありません。具体物や動作を示しながら、短い言葉をシャワーのようにかけてあげることが、このレベルでは大切です。

写真や絵などの視覚教材、半具体物など、子どもが興味を

小学校 中高学年 話す レベル2

このレベルの主な特徴	よく耳にする日本語表現を話し始めるレベル
子どもの様子・ ことばのやりとり	<ol style="list-style-type: none">1. 身近な場面で使う挨拶などの言葉を覚え、使い始める。2. 身振りや具体物に頼ってコミュニケーションを行い、それを分かってくれる人と行動をともにする。3. 質問を繰り返したり、他の子どもの発言を真似たりする。4. 日本語力がついてくると、周囲に働きかけようとするが、まだうまくやりとりができない。5. 意味を伝えるために、日本語のイントネーションなどを使い始める。6. 意味を確認するために、同じ第一言語を話すクラスメイトに第一言語で話しかけたり、通訳を求めたりする。7. 第一言語で獲得した会話のスキルをもとに、コミュニケーションをとろうとする8. 第一言語に関わる文化的知識や態度、価値観を持っていることがある。9. 日本語を「話す」力はなくても、第一言語を使う家庭、地域社会、学校などでは、子どもの年齢に応じた範囲で、第一言語を話すことができる。ただし、個人差がある。

解説② 「第一言語の影響」とは：

このレベルは、子どもが身近な場面でよく使う日本語表現を理解し、その日本語表現を使用し始める段階です。小学校中高学年の子どもは、日本語で話す力が弱くても、それまで使用してきた第一言語の「話す」力がある場合がほとんどです。そのため、その第一言語の影響によって、日本語の音の聞き分けが難しく、それが日本語を話すときの発音にも影響する場合があります。

また、日本語の質問を理解し、それに答えるのに時間がかかることもあります。しかし、第一言語の「話す」力が、日本語を学ぶ上ですべて障害になるわけではありません。生まれてから小学校中高学年になるまでの、第一言語による経験は、人と人とのコミュニケーションを理解する基礎的な力として、日本語学習にも役立ちます。

1の例：

「おはよう」「はい」「だめ」等

4.

- ・クラスメイトと一緒に遊びたくても、うまく言えなくて、「いっしょにあそぼう」と言うつもりで、その人の肩を叩いたりする。そのため、クラスメイトに「乱暴」な印象を与えることがある。
- ・簡単な単語を使い、他人に指図する。

5の例

疑問を表すために、「これ、ほん(ん)」と言う。

指導上のポイント：

「きれいくない」は、大人の日本語学習者も使用しますが、これは、「おもしろい」「さむい」などの否定形をもとに、「きれいだ」の否定形を作ろうとしたものです。これは、言語を処理する力があると評価し、否定的に捉える必要はありません。暗示的に、あるいは明示的に、いろいろな方法で指導しましょう。目の前の子どもは、日本語習得の長い過程の一場面にいると見るのがポイントです。

小学校 中高学年 話す レベル3

このレベルの主な特徴	「身近な話題」について、簡単な日本語でやりとりができるようになるレベル
子どもの様子・ ことばのやりとり	<ol style="list-style-type: none">1. 日常会話において、二語文、三語文から、徐々に自分の言葉で話し出す。2. 身近なことや好きなことについて一対一の会話に参加できるが、限られた日本語力しかないので、言いたいことを日本語でどのように言うか考えるために時間がかかったり、考えながら、あるいはつかえながら話す。3. 全般的に、間違いをおそれず、話すようになる。4. 教師の補助（言い換え、わかりやすい語句、視覚教材など）があり、身近な話題なら、会話に参加できるが、在籍クラスの授業では教師とクラスメイトの会話に参加することは難しい。5. 接続詞が限られているため、単文を使った発話が多く、複文を使った発話は少ない。6. 第一言語で獲得した会話のスキルをもとに、コミュニケーションをとろうとする。7. 第一言語に関わる文化的知識や態度、価値観を持っていることがある。8. 日本語を「話す」力はなくても、第一言語を使う家庭・地域社会などでは、子どもの年齢に応じた範囲で、第一言語を話すことができる。ただし、個人差がある。

解説③ 日本語の力がつくと、積極的になる：

このレベルは、子どもが「身近な話題」について、簡単な日本語でやりとりできるようになり、日本語で学習をし始める段階です。また、次のような様子も見られます。

- ・時間をかけて根気よく聞いてくれる人がいて、足場かけが与えられれば、考えながら話したり、発話をもう一度まとめて話したりできます。
- ・教師やクラスメイトと話すときは、繰り返しを求めたり、やりとりをしながら、話されている内容を理解しようとする。間違いをおそれず、話すようになります。
- ・考えや意味を確認したり、やり方や手順や解決方法を考えるために、同じ第一言語を話す仲間に第一言語で話しかけたりします。
- ・文脈と聞き手の補助に大いに頼ります。(例：話題や話の流れ、考える時間、身振りや表情、質問の言い換え等)

2、3の例：語順が不正確だが、間違いを恐れず話そうとする。

子ども：「きのう、行った、大阪。」

教師：「へえ、大阪へ行ったんだ。だれと？」

子ども：「お父さんと。」

教師：「きのう、お父さんと大阪へ行ったの？」

子ども：「うん、楽しかった。」

5の例：理科の実験で、水の蒸発についての問い

教師：「どうして水がなくなったと思いますか？」

子ども：「水、ない。……」

教師：「どうして、なくなったと思いますか？」

子ども：「えーと、火、あつい、えーと、……、
水、少なくなる？」

指導上のポイント：

このレベルの子どもは、タイムキーパーなど、あまり日本語を話さなくてもいい、明確な役割が与えられれば、活動に参加できます。学習活動の中に見える「文脈」を利用して、日本語を少しでも使う場面に参加する体験ができるように指導することも大切です。

小学校 中高学年 話す レベル4

このレベルの主な特徴	「身近な話題」から、「目の前にないもの」についても日本語で話そうとするレベル
子どもの様子・ ことばのやりとり	<ol style="list-style-type: none">1. 身近な話題を超えて、日本語の使用が広がり、習った日本語を使い始める。2. よく聞いてくれる相手がいれば、自分の生い立ちや最近の出来事などについて、順を追って話すことができる。3. ただし、使える接続詞はわずかで（けど、だって、でも、等）、在籍クラスの授業で教師の質問に的確に答えるのはまだ難しい。「はい」「いいえ」を超える質問にはなかなか答えられない。4. クラスメイトが使うような表現（～でね・うーんとね・～じゃん・でもさー、等）を使いながら話を続けることができるが、長い発話は途切れがちで、より正確に言おうとすると、ブツブツと途切れる。5. 知っている日本語を駆使して日本語を使用しようとするので、正確さに欠ける（たとえば時制の認識や使い方）が、その発話は理解できないほどではない。6. 助詞はまだ習得途中で、助詞が抜けたり、助詞を適切に使えなかったりすることもある。7. 第一言語で獲得した会話のスキルをもとに、コミュニケーションをとろうとする8. 第一言語に関わる文化的知識や態度、価値観を持っていることがある。9. 第一言語を使う家庭・地域社会などでは、子どもの年齢に応じた範囲で、第一言語を話すことができる。ただし、個人差がある。

解説④ なぜ「もう指導は必要ない」と思うのか：

このレベルでは、子どもは習った日本語を試そうとする段階です。「身近な話題」から、「目の前にないもの」についても日本語で話そうとします。たとえば、生い立ちや空想、物語を読んで考えたこと、以前に体験したことなど、目の前にないことも話そうとするようになります。ただし、その発話は、文としての結束性は不十分で、正確さに欠けます。子どもの発言をよく聞くことは大切ですが、教師は、意味を補って聞くため、子どもが話せるようになったと勘違いし、「もう指導は必要ない」と判断することもあります。しかし、このレベルは、依然、継続的な支援が必要な段階です。

「目の前にないもの」→小学校低学年「聞く」レベル4を参照。

2.

「よく聞いてくれる人」とは、子どもの言いたいことの意味を確かめたり、語彙を助けたりしながら、話をよく聞いてくれる人を言う。「よく聞いてくれる人」がいると、子どもは自分の考えや思いを詳しく話そうとする。文法的な間違いを恐れず、話そうとする。

→小学校低学年「話す」レベル4を参照

3の例：

教師の補助（見本を示す、語彙を補うなど）があり、事前に準備をすれば、

- ・「朝のニュース」をクラスの前で一人で発表する。
- ・水の循環のプロセスを簡単な言葉で説明できる。

指導上のポイント：

日本語能力が向上するにつれて、より複雑な考えを表現しようとしたり、頭で理解している日本語と話せる日本語の差を実感して、フラストレーションを感じたりする場合があります。その場合、子どもの話を「よく聞いてくれる相手」が必要です。「発話を補助する（語彙を補ったり、文を完成させたりする）」ことをしながら、子どもが言いたいことをたくさん話せるように指導し、同時に、課題も発見していきましょう

小学校 中高学年 話す レベル5

このレベルの主な特徴	さまざまな生活場面で日本語を使用する力が定着してきているが、学習場面では、表現する力はまだ限られているレベル
子どもの様子・ ことばのやりとり	<ol style="list-style-type: none">1. 日常的に行われている主な教室活動に参加することができる。2. コミュニケーションのつまずきをほとんど起こさずに話すことができる。3. 在籍クラスの教室活動には他のクラスメイトと協力して参加できる。しかし、話す速度が速かったり、馴染みのない話題や文化的要素が多く含まれている話題の場合には、会話に参加できないことがある。4. 学習場面において、複雑な内容や概念を日本語で表現することが困難な場合がある。5. 語彙は増えているが接続表現が限られており、深い内容を表現できず、細かい議論に参加できない場合がある。6. 第一言語で獲得した会話のスキルをもとに、コミュニケーションをとろうとする。7. 第一言語に関わる文化的知識や態度、価値観を持っていることがある。8. 第一言語を使う家庭・地域社会などでは、子どもの年齢に応じた範囲で、第一言語を話すことができる。ただし、個人差がある。

レベル5は長い坂

このレベルの子どもは、日本語をかなり話すことができますが、まだ語彙や文法知識や表現が不足しています。それを獲得するには、長い時間がかかります。そのため、このレベルに長く停滞しているように見える子どももいます。特に学習場面において、学習内容について基礎知識がなかったり、第一言語での読み書き学習が中断したりした子どもにとっては「レベル5」は長い坂のように感じられるかもしれません。「レベル6」に伸長するためには、さらに言語面の継続的な支援が必要です。

解説⑤ 「深い内容」とは何か：

このレベルの子どもは、日本語を使用する力が定着してきており、日常生活のさまざまな場面でよく話しますので、他のクラスメイトと同じように見えます。そのため、教師はその子に対して日本語指導の支援が必要でないと考えがちです。しかし、注意深く発言を聞くと、話の展開や文の結束性に欠如があり、複雑な考えや事柄を十分に話せない場合があります。子どもは、語彙や表現がある程度身につけてくると、その範囲内でやりとりし、やりすごしてしまいます。そのため、小学校中高学年の子どもの認知発達のレベルで期待される力（思考力、判断力、表現力等）を的確に発揮できず、話している内容に「深さ」が感じられない場合があります。その点が、このレベルの子どもの新たな課題になります。

「なぜ学習場面では理解が難しいのか」→小学校中高学年「聞く」レベル5を参照。

4の例：

- ・社会科の議論や理科の事柄の説明など。

5の例：

- ・「～するとき」「～してから」「～するまで」「～するまでに」「～すると」「～したら」「～すれば」等の前後関係や継続、条件を表す表現。

指導上のポイント：

日本生まれで、日本語を第一言語としない子どもの場合は、日本語の口語表現に慣れていたり、社会文化的事情を良く知っていたりするため、同じ年齢でも、後で日本に来た子どもよりも日本語力が高いような印象を与える場合があります。しかし、発話の内容の「深さ」という点では、どちらの子どもも、依然、同じ場合もあります。このレベルの子どもにも、在籍クラスでも、個別に注意を払い、継続的な指導を行うことが必要です。

小学校 中高学年 話す レベル6

このレベルの主な特徴	ほとんどの生活場面で日本語を十分に使えるようになるが、学習場面では表現できない部分はまだあるレベル
子どもの様子・ ことばのやりとり	<ol style="list-style-type: none">1. 年齢と学年に応じた生活場面や学習場面に、積極的に参加することができる。2. 教師やクラスメイトの助けをほとんど借りずに自分自身の考えや意見を述べることができる。3. 学習内容が知らないことであっても、内容や語句をきちんと教えられればより複雑な考えが理解でき、かつ表現できる。また他の人にそれを説明することもできる。4. 複雑な表現や微妙な表現を運用する力が育ちつつある。5. ただし意図を正確に表現することは依然として困難な場合がある。6. 何かを伝えるときに必要な語彙が分からない場合でも、既に学習した語彙を使って何とか伝えることができる。7. 第一言語で獲得した会話のスキルをもとに、コミュニケーションをとろうとする。8. 第一言語に関わる文化的知識や態度、価値観を持っていることがある。9. 第一言語を使う家庭・地域社会などでは、子どもの年齢に応じた範囲で、第一言語を話すことができる。ただし、個人差がある。

日本生まれの子どもたち

日本生まれで、幼少の頃から家庭内で日本語以外の第一言語に触れ、家庭外で日本語に触れながら成長した子どもの場合は、日本語をかなり話すことができますが、第一言語の力は限られている場合があります。家庭内で聞く第一言語が、親が言う「ごはんを食べなさい」「歯を磨きなさい」といった内容の言葉、つまり「台所の言葉」(kitchen language) だけの場合、第一言語の力は育ちません。そのため、子どもは人前で第一言語を話さない場合もあります。第一言語に対する心を育てることも、大切なことです。

解説⑥ 「話す」力とは何か：

このレベルの子どもは、生活場面でも学習場面でも日本語を十分に使えますが、部分的な欠如があるレベルです。

「話す」力は、単に「ひとりでしゃべる力」や「クラスでスピーチをする力」ではありません。実際のコミュニケーションの場面では、話し手と聞き手との関係性や話す場面、話の流れなど多様な条件を理解し、かつ話題に関する情報やあらゆる知識を総動員して、発信しようとする力が「話す」力と言えるでしょう。したがって、このレベルの子どもには、多様な場面を与え、それぞれの目的に応じた日本語使用を考えさせる機会をたくさん与えることが大切です。

→ 小学校中高学年「聞く」レベル6を参照。

4、5の例：

・「かもしれない」「～しかない」「～もある・」「まだ」「もう」「～たら」「～すれば」「らしい」「ようだ」「～するとき」「～してから」「～するとき」「～してから」等を使えるようになるが、常に正確に使えるわけではない。

7の例：

はじめに、自分の意見を先に言ってから、あとで、理由を言うスタイルを好む子どももいます。逆に、理由や説明が長く、言いたいことがわかりにくい子どももいます。

指導上のポイント：

教師主導型の教育を主に受けてきた子どもが、在籍クラスの子どもたちによる自発的な発言で進む授業に出ると、無口になったり、控えめになったりする場合があります。それは、学びのスタイルが異なることによって、子どもの反応が異なるからです。

コミュニケーションのポイントは、話す人と聞く人の関係づくりです。自分の発言が教師やクラスメイトに聞き入れられたという体験が学ぶ意欲につながります。主体的で対話的な学習を通じて「聞く」力を伸ばしていきましょう。

小学校 中高学年 話す レベル7

このレベルの主な特徴	日本語を十分に使用することができるレベル
子どもの様子・ ことばのやりとり	<ol style="list-style-type: none">1. 年齢と学年に応じた生活場面や学習場面で、流暢かつ正確に、口頭でコミュニケーションができる。2. 社会文化的な経験や知識が足りずに理解できないときは、質問することができる。3. 日本語で正確な言い方を知らない場合には、別の言い方で手際よく説明することができる。4. 第一言語で獲得した会話のスキルをもとに、コミュニケーションをとろうとする。5. 第一言語に関わる文化的知識や態度、価値観を持っていることがある。6. 第一言語を使う家庭・地域社会などでは、子どもの年齢に応じた範囲で、第一言語を話すことができる。ただし、個人差がある。

解説⑦ 「年齢と学年に応じた」とは④：

小学校の中高学年の子どもは脳が発達し、認知力が広く伸長する時期です。そのため、年齢と学年に応じて、より複雑な内容を考えたり理解したりする活動が多くなります。クラスメイトとたくさん話しながら考える活動や、考えたことをポスターやグラフ等を使いながら口頭発表する活動などを行うためには、「ことばの力」は不可欠です。したがって、発達段階に応じて、子どもの成長を育む言語教育が、必要なのです。

2.

日本の童謡や昔話などに出てくる日本の伝統的な生活習慣や文化的事項についてよく知らないため、うまく使えない語彙もある。

例：伝統的な日本の衣・食・住に関する言葉、伝統的な行事や季節に関する言葉等。

6.

台所用品のように日頃第一言語を使って表現している語彙や、第一言語にあって日本語にない表現、あるいは日本にない事象については第一言語でうまく説明することができる場合もある。

指導上のポイント：

小学校高学年では敬語が導入されますが、子どもによっては丁寧な言葉遣いや関係性にもとづく発話への理解が必ずしも十分ではないことがあります。

一方、中高学年の子どもは言葉を言葉として捉える力、いわゆるメタ的な力（メタ言語能力）が発達していきます。高学年になると、言語についての気づきから、第一言語と日本語の相違点や類似点を日本語で説明することができるようになっていきます。そのような発達段階も踏まえながら、子どもの持つ複数言語能力への気づきを促し、そのことを肯定的に捉えられるように助言しましょう。